
ギルド

青空白雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギルド

【Nコード】

N3999R

【作者名】

青空白雲

【あらすじ】

タイタニアンに入ろうとする少女 メラは銀髪の少年 ギンを助ける。

ギンはタイタニアンの煽りをくらって廃業寸前のギルドマスターであった。

ギンは気に入ったメラを仲間に取り込みようとするが、メラは誘拐されてしまう。

ギンはメラを救い出し、仲間にすることが出来るのか！？

段ボールが二、三個転がっている狭いアパートの一室で、一人の少女が段ボールを机代わりにして両親に手紙を書いていた。

天井に埋め込んである透明の魔石から絶えず光りが送られ、少女の頬を優しく照らしている。

髪は栗色で、肩まで伸ばしている。

睫が長く、涼やかな瞳。鼻梁の線が綺麗で、肌は雪のように白く、風呂上がりのように赤らんでいる。

少女ーメラ・アルフォートは師匠から貰った万年筆をスラスラと走らせる。

初めての手紙にしては、スラスラ書けてびっくりする。

もしかしたら、私には手紙を書く才能でもあるのかもしれない。そんな下らないことを考えつつ、手紙を書いていく。

やがて、手紙を書き終えたメラは万年筆をスカートのポケットの中へ入れる。

メラは手紙の内容を読み返す。

「両親へ」

（両親へ、って距離感じるなあー。喋り口調で書いた方がよかったのかなあ？）

出だしから躓いた。

手紙を書く才能はなかったのかもしれない。

更に読み進めていく。

「この町の生活に慣れたら町一番のギルドータイタニアンに入れて貰おうと思います。

師匠が「魔法に大切なのは精神力だ。体調を整えて自信を持って望めばギルドの試験なんて一発だ」と言っていたので、自信を持って行こうと思います。

まあ、酔っていたからその場の勢いで適当に言っただけかもしれない

ないけど……。

ギルドに入れたらバンバン仕事して二人の報酬金を送るから楽しみに待っててね。入らないとか言わないでよ？

今まで育ててきてくれた感謝の気持ちなんだから。

PS・師匠にはお酒を飲み過ぎないように注意しておいてね。

PSのPS・住所はノクターン町、六十三番のRS。

大きな魔法道具屋の裏手にあるのですぐにわかると思います」

メラは読み返して顔面からぼふう、という気の抜けた音と共に霧のような炎が吹き出した。

「恥ずかしいー！ 何で、私はー！ しかも何か敬語だし！」
手紙だと言えないような事も言えちゃうよね！

そんな事を身に染みて知った十六歳の秋だった。

十日後。

メラはドキドキと高鳴る胸を押さえながら歩いていた。

準備は万端。魔法道具を革袋に入れて、魔力も体調も万全だ。

通りには魔法道具ー杖を片手に持っている魔法道具使いや、斧を背中に背負っている戦士などが歩いている。

そうこの人達は皆、タイタニアンに入ろうする者達だ。

タイタニアンをもっと大きくしようとしたのか、依頼の件数が増えたのか、ギルドマスターが三年前から、入団テストを行うと宣言したのである。

それを聞いたメラは故郷を離れてこの町まで来たのだ。

とはいえ、相当厳しいテストなのか殆どの方はテストに受からならしい。

「オラ！ テメエ！ 俺らタイタニアンの魔法使いに楯突いてんじやねえ！」

怒鳴り声が響き直後、砂袋を蹴るような音がした。

メラは『タイタニアン』という言葉に一瞬反応が遅れた。

メラは怒鳴り声の位置を探す。

鈍い音がした。

瞳を音の発信源　魔法屋の裏路地に向ける。

その裏路地は薄暗く、少しジメジメしている場所だった。

男は罪悪感の欠片もない様子で十五歳ほどの銀髪の男の子をボールのように踏っている。

「いたたた……」

少年は蹴られた頭を押さえるが、男に蹴りとばされる。

「俺に逆らった罰だ！」

男はいやらしい笑みを浮かべながら両腕を上げた。

「ちよつと止めなさい！」

あ？　と男は興が削がれたのか笑みを消して、後ろを振り返った。

男を睨みつける少女、メラが居た。

メラは身体中の魔力を掌に集める。

メラは大きな声で鮮明に宣言する。

「止めないなら、燃やすわよ」

ハッ、と男は嘲笑う。

「俺の炎魔法を受けてみやがれ！」

掌から真つ赤な炎を生成される。

子供が大きなボールを投げる時のように両腕で炎を投げた。

炎は揺らぎ、いきなり広がった。

そして、一つの壁となり棒立ちのままのメラにぶつかった。

炎が空気中に霧散する。

魔力で作られた炎は魔力が切れれば消えてなくなるのだ。

男は勝利を確信して微笑を浮かべた。

銀髪の少年はそんな男を見て、忠告する。

「逃げた方がいいと思うよ」

「ああ？」

笑みを消し、男が少年を踏みつぶそうと足を上げる瞬間、見た。メラは当たり前のように立っている姿を。

「な……っ!？」

男は足を上げたまま驚愕の表情でメラを見る。

メラは弱い者虐めをしている男を、軽蔑の眼差しで見ながら思う。
(よくあんな炎しか出せない癖によく威張り散らしてたな……)

「弱々しいなあ……」

溜め息混じりに掌を振るう。

酸素を吸い込む轟音と共に蒼の炎が鞭のようにしなり、男の腹を叩きつけた。

「があ……ッ!？」

男は一、二歩後ずさる。

そして焼かれた腹を両腕で押さえて、

「あっちいいいい!」

馬鹿みたいな速度で逃げて行つた。

メラはそれを見届けると、蹴られていた男に近づく。

男はボロ雑巾のように寝転がりながらにっとな笑う。

男は酷く竄れていた。

あの男に余程酷くやられたのか、外套もボロボロだ。

「ありがとう。君の魔力凄いおいしそうだねえ……」

そしてそのまま、力尽きたようにガックリ、と瞳を瞑った。

「大丈夫?」

メラが心配して訊くと、十五歳ほどの男は一言。

「オイラお腹減った」

肉肉肉肉肉肉。

山程の肉料理がテーブルにのっかっていた。

少年はそれらの肉料理を湯水のように飲み込んでいく。

「んまいんまい!」

「あんた、食いすぎ……どんだけお腹減ってんのよ……」

メラは呆れたように言う。

請求額が心配だが、見た感じ安そうな物ばかりだし大丈夫だろう

と見当を付ける。

「だって、オイラは、んん、二日前から、んぐんぐ、何にも食べてないから……」

軽く「へー」とスルーしそうになる程、少年は軽い調子で言った。

「何も食べてないの？」

少年はもぐもぐと肉を食い散らかしながら喋る。

「おふ。おふらぎふどやふえふえれたふたふにあん」

「喋るか、食うかにしたら？」

メラは注意を促す。

暗に食べるのをやめるコラ、と言ったのだが、

「ふおーらな」

少年は頷いて食べ始めた。

「って食べ始めるなあ！」

メラは頭を平手で殴ってツツコミを入れる。

「ぼふう！？」

パンパンに詰め込んであった食べ物が一気に皿に放たれた。

「何すんの！？」

少年は音速で顔をあげて文句を言った。

「で。何で二日も食べてないのよ？」

メラがジュースを一口飲んで問い直す。

「うん。オイラギルドやってるんだけど。タイタニアンって言うギルドのせいで仕事が全然来なくてねえ……今月も猫探しとローリングスター家のおじいちゃんの耳搔きの依頼しか来なかったし……。報酬金は後払いだし、世界最大のギルドにするっていうの夢は遠いなあ……」

回答途中で独り言に移行してしまう少年。

（会ってから何となく思ってたけど究極のマイペース男だわこいつ）

メラはそんな事を思いながら少年の言葉にツツコミを入れる。

「アンタみたいなガキがギルドを経営できるわけないじゃない」

「あ、そうそう。ローリングさんの所は老夫婦なんだけど、もうす

ぐ離婚するんだって……悲しいよね……」

ズーン、という効果音を伴って曇天の空を見つめる少年。人の愛情の儚さを嘆いているような悲しそうな表情である。

と。

何か思い出したかのようにくるつとメラを見て、

「え？　なんか言わなかった？」

「だからアンタみたいなガキがギルドを経営できる訳ないじゃない！」

思わず怒鳴ってしまうメラ。

少年は首を傾げて言う。

「別に実力があればいけるよ？　ほら、証明証」

外套の内側からカードを取り出してメラに差し出す。

やれやれ、と首を振り、溜め息を漏らしながらカードを受け取る。顔写真がペタリと貼られてあった。

しっかりこの少年の顔だ。

その下に『ギン・クライシス』と書かれてある。

マジマジと写真と目の前の少年を見比べて、

「名前は？」

少年は目をぱちくりとさせ、

「そこに書いてあるけど……あつ。字が読めないのか。ゴメンよ。」

写真の下にはギンって書いてあるんだよ」

につこりキラキラ。

優しい表情でメラに言う。

メラの拳がふるふる震える。

（嫉妬するわ。私よりも（精神年齢的に）子供なのに……ギルドを作る資格があるギルドマスターだなんて）

メラの嫉妬に全く気づかずにギンはうふふふ、と肉とキャベツを巻きながら食べるという方法を発見して喜んでいた。緩い笑顔だ。

「あ、そうだ。君の名前は何なの？」

肉巻きキャベツを食べつつギンは言う。

「メラ。メラ・アルフォート」
（そういえばギルドマスターが何であんな雑魚にやられていたのかしら？）

メラとギンは大通りを口論しながら歩いていた。

「ねえ。オイラのギルドに入っておくれよ」

「や」

「何で？ 楽しいよ？」

「私はタイタニアンに入るんだから」

「何で？」

「大きな仕事があるから」

「お、お金の亡者だ！」

「うるっさいわね！」

「怖い！ 妖怪『お金の亡者』！」

「ギンは早く猫探しでもしてくれば？」

「だから説得しながら猫を探してるんだよ」

「くっ。ああ言えばこう言う……っ」

「オイラの夢はギルドを世界一大きくすることなんだよ。一緒に夢を追いかけてようよ」

「あーあー聞こえませーん」

「入ってよオイラのギルド！ 絶対楽しいから！」

身振り手振りで楽しさをアピールするギン。

飲食店を出てから専らこの調子である。

正直、鬱陶しい。

というか、周りから突き刺さる視線が凄く痛い。

「そういえば」

メラはある疑問を投げかけた。

「何で私をギルドに入れようと思ったの？」

ギンはその疑問に胸を張って答えた。

「オイラがメラを気に入ったから！」

真っ直ぐな言葉に少しくすぐったい嬉しい気持ちになる。

「あ、そういえば、タイタニアンの試験って難しいらしいねえ？」

緩い笑顔を浮かべて、聞いてくる。

「まあそうね」

「じゃあ、試験に滑ったらオイラの所に来ておくれよ」

ギンの提案を受けようかどうか迷ったが、すぐに頷いた。

おそらく受かるという自信があったし、頷かないとこれまで以上にうるさくなると思った結果である。

ギンは暗く微笑むと、掌をメラに向ける。

「むん。落ちロー落ちロー」

メラは怒ったような呆れたような表情をする。

「くっ……！ 性根の悪い奴ね。頑張つてとはいえないわけ？」

ギンはメラの手を数秒間見つめたあと、ぎゅっと握った。

「……えーと、何？」

何とも微妙な顔でギンを見るメラ。

ギンは晴れ晴れとした笑顔で言った。

「メラ、炎の純正魔力を持ってるよね。それもかなりの魔力量だね」

メラは少し、ビツクリした後に、ふっと微笑んで、

「何でわかったの？」

「だってメラの魔力がすごいおいしそうだったし。体温もスゴい熱いし。炎に当たったときも服が燃えてなかったしね。確か、二千度までだったら魔力のお陰で服も燃えないんだよね」

純正魔力 それは世界が起こす奇蹟の内の一つで、希に生まれる存在であり、風、水、炎、氷、土、雷の六種類がある。

普通の魔法使いはその五種類が混成している魔力を持っているのが普通で、様々な現象を起こせる。

しかし、純正魔力の担い手はたった一つの魔法しか使えない。

但し、代わりに凄まじいまでの魔力量と質、そして爆発的な攻撃力を有しているのだが。

メラがギンの言葉を思い返し、首を捻る。

「魔力がおいしそうって何？ それに、何で私の魔力の量を……？」
「ん？ ああ、オイラは魔力」

と、ギンが説明しようとした直後。

ピクツとギンの身体が魔力の香りに反応した。

風が辺りを舞い始める。

風がギンの頬を強く叩く。

魔力がゼロから段々増えていくのを感じて、メラに言う。

「メラ。この風、何かおかしいよ……ってあれ？」

メラが地面に倒れていた。

「全く、メラ。こんな所で寝てたら風ひく……」

メラを起こそうとした直後。

雨音をもっと大きくしたような音が響いた。

大通りを歩く人々が倒れた音だ。

ビクツと大きな音に跳び上がったギンは、

「もしかして、この風と水の魔法に……？ あれ？ この魔力……」

何かに気づいた直後、強風が吹いた。

突然のことにギンは踏ん張ることも出来ずに飛ばされる。

「わあああ？」

大通りをぐるんぐるんと回転する。大通りと空が回転して目が回る。

ギンは足をブレーキ代わりにして止まった。

「一体何を……」

ギンはメラの居た場所を見た。

男達二人が居る。

一人は二十代ほどの黒髪の男。

もう一人は険を腰にぶら下げている剣士である。

黒髪の男は、メラを担ぐ。

「君たちは誰？ メラを置いて行って」

いつもとは違う凜とした表情でギンが言う。

「貴様、何故眠らない？」

剣士が怪訝な瞳でギンを見つめた。

「何かの防御陣を張ったか……どっちにしる相当の使い手だ。足止めしとけ」

黒髪の男は顎をギンの方に向ける。

「御意」

剣士一つ頷き、爆発したように走った。

メラを担いだ黒髪の男は空へと飛び去った。

風魔法だ。

ギンは手を伸ばして駆けだそうとする。

直後。

銀色の線がギンの髪を切った。

「わ……ッ!？」

思わず後退り、距離をとる。

「危ないなあもう！ オイラはメラを仲間に入れるんだ！ どいておくれよ！」

ギンの文句にも構わず、目の前の剣士はだらりと全身の力を抜く

『無形の構え』を取った。

「それはできんな。メラ・アルフォートは我々の野望を完成させる燃料なのだからな」

ギンにそんなことは興味はなかった。

「オイラを通す気はないってこと？」

ギンは首を傾げて訊く。

「ああ。諦めて家に帰れば殺しはしない」

剣士は至極真面目な様子で言う。

「そっか」

邪魔をすることが分かればもう十分。

悪意をもって動いている、メラが危ないと分かれば十二分。

剣士の剣を見る。

うねうねとした模様が剣に彫り込まれ、柄に三つ魔石が埋め込まれていた。

三つ共白くコーティングしてあり、何の魔力が込められている魔石なのかがよく分らない。

柄の少し上の刀身にも二つ縦に埋め込まれている。

魔石を使い剣術を使う『魔石使い型剣士』だ。

ギンはさっきの魔力の味を思い出して、首を傾げる。

「まあいつか。きなよ」

何の構えも取らずに相手に言う。

「死んでも構わないってことだな？」

不敵に笑い、突っ込んできた。

腰に手をつ込んで、布袋を取り出し、袋を振った。

袋からは液体がキラキラと幻想的に光っている。

男は剣を振った。

風を斬る音と共に柄にあった魔石が光り輝く。

魔石から水が蛇のように溢れ出た。

蛇は刀身を滑り、剣先から空気へとその身を投げ出す。

キラキラ光る液体を飲み込み、ギンに突進する。

ギンはそれを見て、すう、と胸に呼吸を溜め、そのまま吐き出した。

炎が口から噴き出る。

蒼く碧く。

それでいて透明な、幻想的な炎だった。

『炎の純正魔力』を持つ者でも撃てるかどうかという炎だ。

炎は水を飲み込み、小さな爆発が数発した。おそらくあの液体の効果だ。

炎が爆発の影響で四散する。

男は驚愕の表情を浮かべて言う。

「私の名前はラクロス。貴様、名前は？」

ギンは拳を握って構えをとる。

「オイラはギン。フリーマジックのギルドマスターだ」

「ほう。ギルドマスターか。面白い」

緊張のせいで強張った笑みを浮かべて剣を真上へ掲げる。
全ての魔石が光り輝いた。

「全力だー!!」

メラは薄らと靄がかった頭で今の状況を考える。
よく分からない。

というか、何が起きたのかすら分からない。
ギンと歩いていたら、こうなった。

頭を何回か叩いて、座り、周りを見渡す。

辺りは薄暗くよく見えない。

カビ臭い臭いが鼻につく。
と。

ぎいい、と軋んだ音と共に薄暗い部屋に光が放射線状に射し込んできた。

段ボールや、魔法道具が積み上げられているのが見えた。どうやらここは倉庫らしい。

カツン、と靴の音が響く。

頭を上げて誰かを見ようとする。

冷やかな瞳を湛えた二十代後半の男だった。

「あんた、誰？」

睨みつけながら言う。

「クロノス」

男は短く答える。

「何で私をこんな所に入れる訳？ 速く解きなさいよ!」

「ダメだ。お前はこのギルド タイタニアンの為の燃料となるんだからな」

な……ッ!? 息が止まるかと思った。

「タイタニ、アン……?」

「ん? 何だ? このギルドに入ろうと思っていたのか?」

男は少し考える素振りを見せてから、言った。

「このギルドの夢を教えてやろう」

「夢……？」

「このギルドも大きくなった。この国一番と言われる程にな。だがまだ大きくなれる。この国を乗っ取ればな」

メラはバカみたいな夢に笑おうとして、失敗した。

こんなに馬鹿デカくなったギルドに出来ないことなどないような気さえする。

「そんなの無理に、決まってるじゃない」

「だけど、言った。」

精一杯馬鹿にするように。

クロノスはふん、と一蹴するように笑ってから喋る。

「魔法兵器地獄^{ヘルフレイム}の業火。これにはある燃料が必要でな……」

燃料……その言葉でメラはハツとする。

「炎の純正魔力……。でも、何で私がそうだってわかった訳！？」

メラを見下すように笑ってから、愉快そうに言った。

「ああ。俺は三年ほど炎の純正魔力を持つ者を探しまわった。ギルドの入団テストだってその一環に過だ。ホントあの頃はイライラしてたなあ……」

過去の自分を思い出したのか笑う。

「だが、ある時酒場で馬鹿みたいに笑う奴に会ってな……」

身体の芯から悪寒が走った。

「ま、さか……。師匠を……。ッ！？」

怒りのまま立ち上がり

「あつさり、お前の居場所を教えてくれたよ」

ずっこけた。

「あ、のクソ師匠……。ッ！？」

「あーあー勘違いすんなよ？ 教えてくれたのは両親の家さ」

冷徹な声が頭に降り注いだ。

冷や水を浴びさせれたように心臓が跳ねた。

冷や汗が噴き出る。

「アイツらホントしつこくてさあ。半殺しにしちまったよ」
怒りで頭が沸騰した。

立ち上がり、口から炎を噴き出す。
最大火力。

鉄だろぅが何だろぅが昇華させる温度だ。
放った自分でさえ熱く感じる一撃である。
しかし。

「それでも喋らねんだよなあ」
クロノスは涼しげな顔をして立っていた。
「ッ!?!」

一瞬だけ頭が真っ白になった。
そして疑問が頭の中を充滿する。

(何で、私の炎で周りが燃えていないの……?)
段ボールなんて余りの温度で発火する筈だ。
ようやく気づく。

クロノスの周りに埃が舞っていた。
風だ。

風の所為で炎が防がれていたのだ。
周りの物を守りながらメラの炎を防いだのだ。
力の差があり過ぎる。

絶望から目を背けたくなる。

「家探ししてようやく見つけたぜ」
懷から投げ捨てられる写真と手紙。

十日前書いた手紙と、両親と映っている写真だ。
それは散々探しまわった物が何気なく机の引き出しから出てくる
ように、

本当に唐突に涙が流れた。

怒りと自分の無力さが溢れ出す。

「うああああああああああああああああッ
ッ!!!!!!!!!!!!」

クロノスに思いつ切り殴りかかる。

とりあえず、殴りかからなければ気が済まなかった。

殴る。ブツ飛ばす！ コイツだけは！

怒りが充満する。

両親がどれだけ愛情を注いでくれたのか。

その全てを拳に載せる。

しかし、拳が相手に届くよりも速く、相手の拳がメラの腹にめり込んだ。

「が、は……？」

目の前が暗闇に塗り潰された。

地面が凹んだ。

「う？」

足が引つ掛かり、バランスを崩した。

直後。

水と火炎の槍。

更に雷を水平にしたような電撃がギンに向かって走った。

「いい？」

水と雷と炎がうねるように合わさり、爆発を巻き起こした。

土煙が舞い上がり、ギンの姿が見えなくなる。

「ははっ！ ギルドマスターって言ってもその程度か。本命を使うまでもなかったな」

ラクロスが勝利したように笑う。

「なっ……！？」

ラクロスが驚愕の声を上げる。

土煙が中心点を作り、そこに集まったからだ。

「ぺっぺ。土が口の中に……ッ！？」

呑気すぎる声が聞こえた。

「くそ！ 流石はギルドマスター！」
身体に緊張が走り、警戒を強める。

ギンの周りにふわりと、土煙が舞い上がった。
おそらく風魔法で防いだのだろう。

「うえー」

ぺっぺ、と唾を吐いて土を吐きだす。

「おらああ！」

ラクロスは剣を一瞬で何十回も振るう。

縦横右斜め下左斜め上右斜め上左斜め下
！

炎が噴き出す。

縦横無尽に切り裂いていく。

更に水が噴き出た。

ギンの眼前で炎と水が混ざり合い、水蒸気爆発を巻き起こす。

「わっ！？」

ギンの驚いた声。

ラクロスが剣を力強く振るった。

グン！ あり得ない轟音と共に水が剣先から噴き出る。

『騙し討ち』

それはラクロスが最も得意とする所だった。

魔石使いと見せかけ、油断させる。

自分よりも強い者と戦う為に生み出された作戦。

そして、最も油断したところで水の純正魔力を使い、切り裂く。

剣先から噴き出た水の剣が家を切り裂く。

ずず、と髪を切るように上下に切れた。

煙まで、ギンまであと少し。

直後、爆発したかのように土煙が舞い上がる。

煙からギンが飛び出した。

「嘘だろ！？」

矢のように速く 剣を振るうラクロスよりも速く、速く、懷に

飛び込んだ。

剣が何か巨大な力で威力が弱まった。

「風魔法っ！？」

ラクロスは驚愕の声を上げる。

柄の少し上の刀身が脇腹に突き刺さらなかった。

そう、柄の上の刀身は斬れ味が極端に鈍い。

ギンはにっと笑って何かを吸い込むように息を大きく吸う。

柄と刀身に埋め込んでいる魔石が赤、青、黄、茶、緑の魔力とな

り吸い込まれた。

魔石はただの石となり、変わり果てる。

ギンは掌を柔らかにラクロスの腹に押し当てた。

「しまった……ッ！」

「楽しかったよ」

にっとう無邪気に笑う。空気が弾ける音と共にラクロスの身体に電気が流れた。

「…ッ！？」

ラクロスはぴくぴく身体を痙攣させながら倒れた。

倒れたラクロスを見てからギンは集中する。

メラの魔力の味を思い出す。

掌を握ったのはトレースを行う為に必要だったのだ。

「出せ出せ！　出せええええええええええええええええええ！」

メラは大声で怒鳴る。

憤怒の表情と共に涙を流す。

そこはビーカーのようなガラス張りの牢獄だった。

但し、耐火性は抜群な牢獄だ。

縄で縛られ、蓑虫のようにモゾモゾと動くしかできなかった。

炎も効かず、拳を撃つこともできない。

「くそおおおおおおおおおおおおおおお！！」

喉が引き裂かれんばかりに叫ぶ。

それでも牢獄の外へ声は届かない。

ここに直径十メートル程のボールがあったでしょう。

馬鹿みたいに大きな筒が無数に付いているボールだ。

そのボールの中心にはガラスの牢獄。

これが『^{ヘルレイム}地獄の業火』

タイタニアン地下にあるホールにそれは置かれていた。

ホールは全て石で造られていた。

テーブルも椅子も。

それは地獄の業火の発射の反動に耐えられる作りにする必要があった。
た為である。

光の魔石が机に一つずつあった。天井にも巨大な光の魔石がある。
地獄の業火を取り囲むように魔法使い達が居た。

「燃料充填……」

クロノスは顎だけを少し動かして命令する。

『はい』

唱和する声が辺りに響く。

二代目ギルドマスターの命令は絶対だ。

クロノスはメラのことなど見てはいない。

見るのはたった一つ。

国を崩壊させ、このギルドが統制する夢のみだ。

狙うは王の住む城。

魔法使い達は掌をガラスの牢獄に向けて、呪文を詠唱する。

「あ……？」

周りを取り囲んでいた魔法使い達が何か呪文を詠唱し始めたと思
った途端、力が吸い取られ始めた。

ガラスの牢獄の中に魔力が溜まっていく。
思い出す。

あのマイペースな少年　ギンの事を。

理由なんて分からない。

もしかしたら、ギルドマスターだからかもしれないし、そんな下
らない事なんて関係なかったのかもしれない。

ギンが緩く笑って立っていた。

『大丈夫な訳ないでしょ！』

メラはそう言ったのだが、ギンにそれを知るすべはない。

逆もまた然りな筈なのだが、読唇術でも会得したのかもしれない。

「ん？ 何言ってるかよく分かんないけど……」

机の上に置いてあつた魔石を食べる。

「メラは返してもらうぞ！」

凜とした表情で宣言する。

「ちっ！ しょうがねえ。俺だけで伝説を相手にするか」

面倒くさそうに首を鳴らし、立ち上がる。

ギンは、ん？ と首を傾げて、

「君は風の純正魔力を持ってた人だね」

「ああ、魔法道具『睡眠薬』を飛ばした時にやったのか……」

「そうだよ。あの人の水魔法で睡眠薬を無理やり皆に飲ませたりしてたときにね」

メラはガラスに耳を張り付けるが、何を言っているかさっぱり分からない。

「死ね！」

いきなり、クロノスは突っ込んできた。

風の魔法で身体を浮遊させながら突っ込んでくる姿は矢に似ている。

ギンは掌から雷を飛ばす。

さながら水平に飛ぶ雷は風で軌道をずらされ、テーブルに当たった。

「おらああ！」

身体全体を使い、腕を振るう。

台風のような風がギンを襲う。

「ねえ。オイラが言うことじゃないと思うけどさ」

「碧い炎を掌から生成。」

風とぶつかり、爆風を起こした。

「あの炎から仲間を守らなかったの？」

その声は、純粹な疑問の他に、僅かな怒りが籠っていた。

「ふん。こいつらは所詮俺の道具にすぎん」

「ッ！」

ギンの顔がムカつと怒りの表情を露わにした。

「そうか。君だけは倒す！」

怒りのままに宣言する。

ドゴン！ 石造りの床が盛り上がり、クロノスを襲った。

クロノスはそれを避けて、ギンに迫る。

「……ッ！？」

ギンの腹に拳がめり込んだ。

「うらあ！」

ギンは口から唾と共に雷を飛ばした。

「ふん」

そう言ったまま、雷を避けた。

先さえ読めれば後は簡単だ。

怒りの所為で周りが見えていないギンの攻撃などクロノスには目を瞑っても避けれる。

拳を振るい、ギンを殴った。

「うおお！」

ギンは吹き飛び、壁に叩き付けられた。

激突した衝撃で石が罅割れる。

ゴブツと腹の辺りから熱いモノが這い上がり、口から飛び出した。血だ。

「っ！」

何かが聞こえた。

ギンはゆっくりと目の前を見上げる。

「ギ……ン……！」

フツと。

緩い笑みがギンに戻った。

「ああああ！！！」

全ての魔力を使い、ギンへと突進した。
怒りで全てを忘れて。

ギンは片手を上げて、全魔力を曇天の空へと注ぎ込む。
バリっと、空気が弾ける音が雲の中で響く。

雲の一部が不自然にねじ曲がる。

「これ……一体……？」

メラは呆けたように空を見上げた。

「天空魔法だよ」

緩い笑顔のまま、メラに笑いかける。

ズズ、と雲から冰山のような氷が覗いた。

雨が石つぶてのように降り注ぎ始める。

「俺の夢をよくも粉々にしやがったなああああああああああ
ああッ！！」

クロノスが憤怒の表情のまま飛んでくる。

「だからそれは夢じゃなくて、野望だよ」

轟音が辺りを埋め尽くし、うねる大風が真下へ槍のように飛んでいく。

巨大な冰山が降る。

落下する冰山にクロノスは押し潰されることしかできずに、沈んでいく。

「がああああああああああああああああッ！！？」

巨大な大風はギルドに居る人々を吹き散らした。

ギンが何かの合図のように力強く腕を振るう。

「こんなギルドと兵器なんかオイラがぶっ潰してやる！」
音もなく光が降り注いだ。

直後。

雷がタイタニアンに激突し、跡片もなく粉々になった。
轟音が轟く。

「あれ……？」

ギンが呟く。

翼が辺りに霧散した。

当然自由落下を始める二人。

「あ、れ？　ちよつと？　ちよつとおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおお！？」

「あははははははは！　魔力使いきっちゃった」
叫ぶメラ。

能天気な笑うギン。

対照的な二人は仲良く落下した。

「いやー猫見つかってよかったねえ」

ふふ、と笑いながら優しそうなおばさんに猫を手渡すギン。

「ありがとうございます」

そうお礼を言っておばさんは出て行った。

「いやー言い事尽くめだねえ。おばさんの猫は見つかるし、ローリングスター家は離婚を免れるし」

ギンは幸せそうにくるくる回って、

「メラもオイラの仲間になってくれたし」

そして、と紙に埋もれた一角を指さして、

「依頼もバンバン来るようになったしねっ」

依頼の山の一角に囲まれたメラは叫ぶ。

「ねえ。何で私とギンしか居ないのよおおおおおお
おおおおおおおおおお！」

「だって気に入った人が見つからないんだもん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3999r/>

ギルド

2011年3月8日14時25分発行